外国語教育とインターカルチュラリティ
「異文化相互理解」: 日米比較研究

ディアンドレ・トンプソン
ハティー・ガードナー
アドバイザー: 齋藤–アボット佳子教授、関根繁子教授

概要

- 研究の重要性
- 研究質問
- 研究背景
- 研究方法
- 研究結果
- 結論
- 参考文献
- 謝辞

研究の重要性

- サービスラーニングの授業を通して言語が多文化の人々を結びつけ、平等さと公平性を促進することを学んだ。
- インターカルチュラリティが留学した際に大事だと痛感した。日本とアメリカでの外国語教育ではその能力をつけるためにどのような教育をしているのかもっと知りたいと思った。
- 将来教師になりたいので、この研究の結果をふまえていい先生になりたい。

研究質問

1. 自分が受けた外国語教育をどのように思っているか。

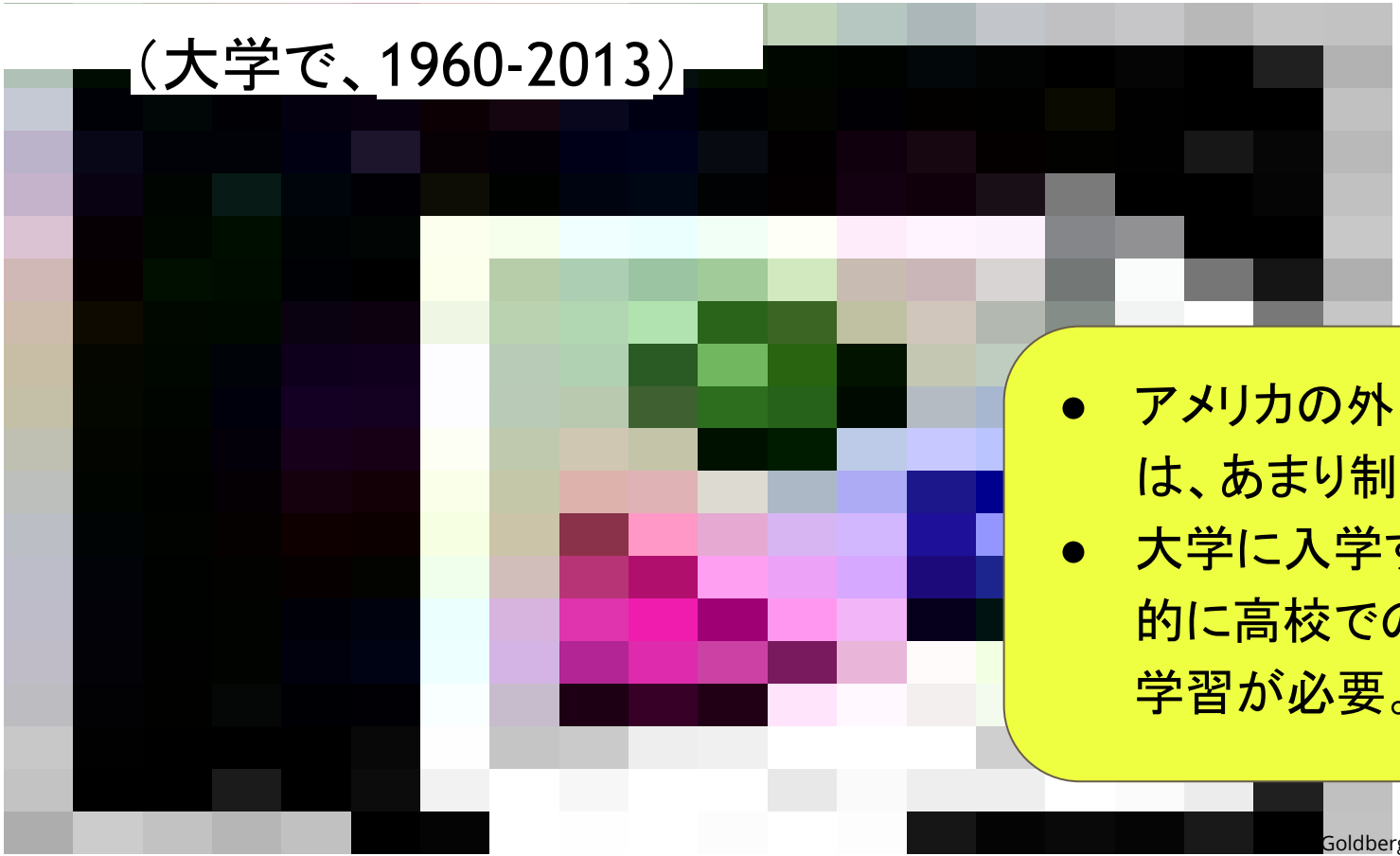
2. 外国語は、異文化に対する知識をどのように深めるのか。

3. 外国語教育は学生と多文化社会を繋げるためにどのような役割を果たしているのか。

研究背景

- 外国語の履修登録の動向
- 海外留学する学生の動向
- 外国語教育の変遷
  - 文法からコミュニケーションへ
- 外国語教育「アメリカと日本」
  - アメリカ：World Readiness スタンダーズ
  - 日本：文部科学省のアクションプラン「戦略構想」
- 学習者の見解
  - 外国語を学習する際に生じる不安感
- インターカルチュラリティ
  - **その重要性**
  - **外国語クラスでの重視**

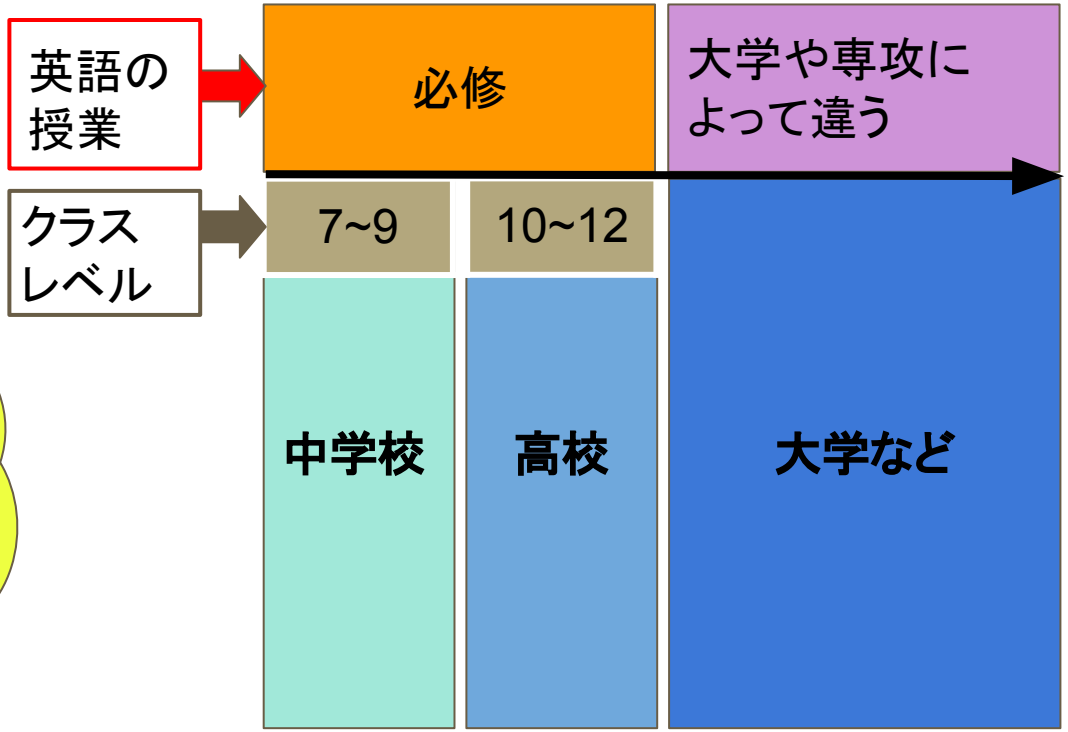
外国語の履修登録の動向:アメリカ



- アメリカの外国語教育には、あまり制約がない。
- 大学に入学するため一般的に高校での二年以上の学習が必要。

Goldberg, D., Looney, D., & Lusin, N., 2015)

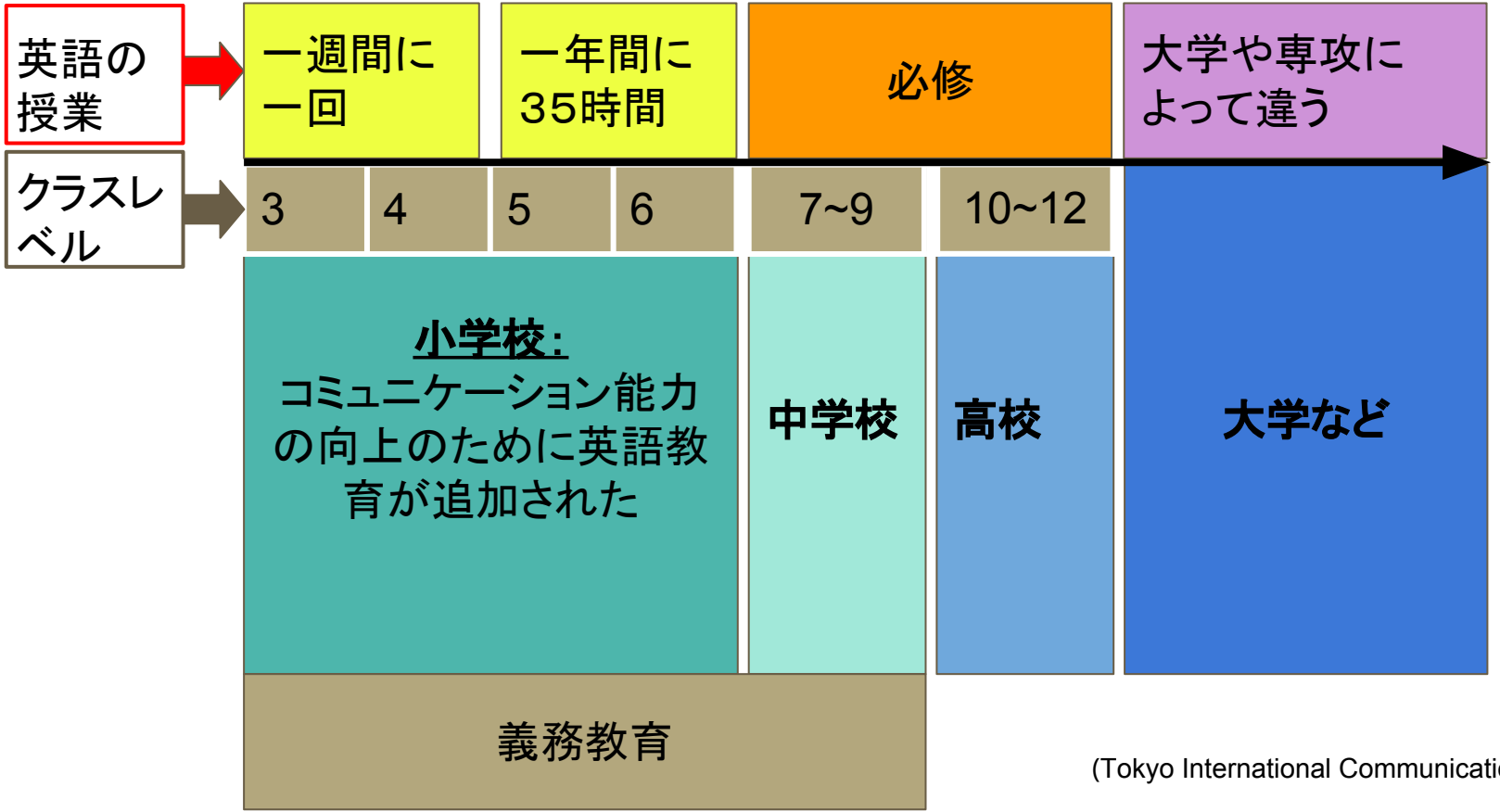
外国語の履修登録の動向：日本



これは過去の英語教育の制度である。

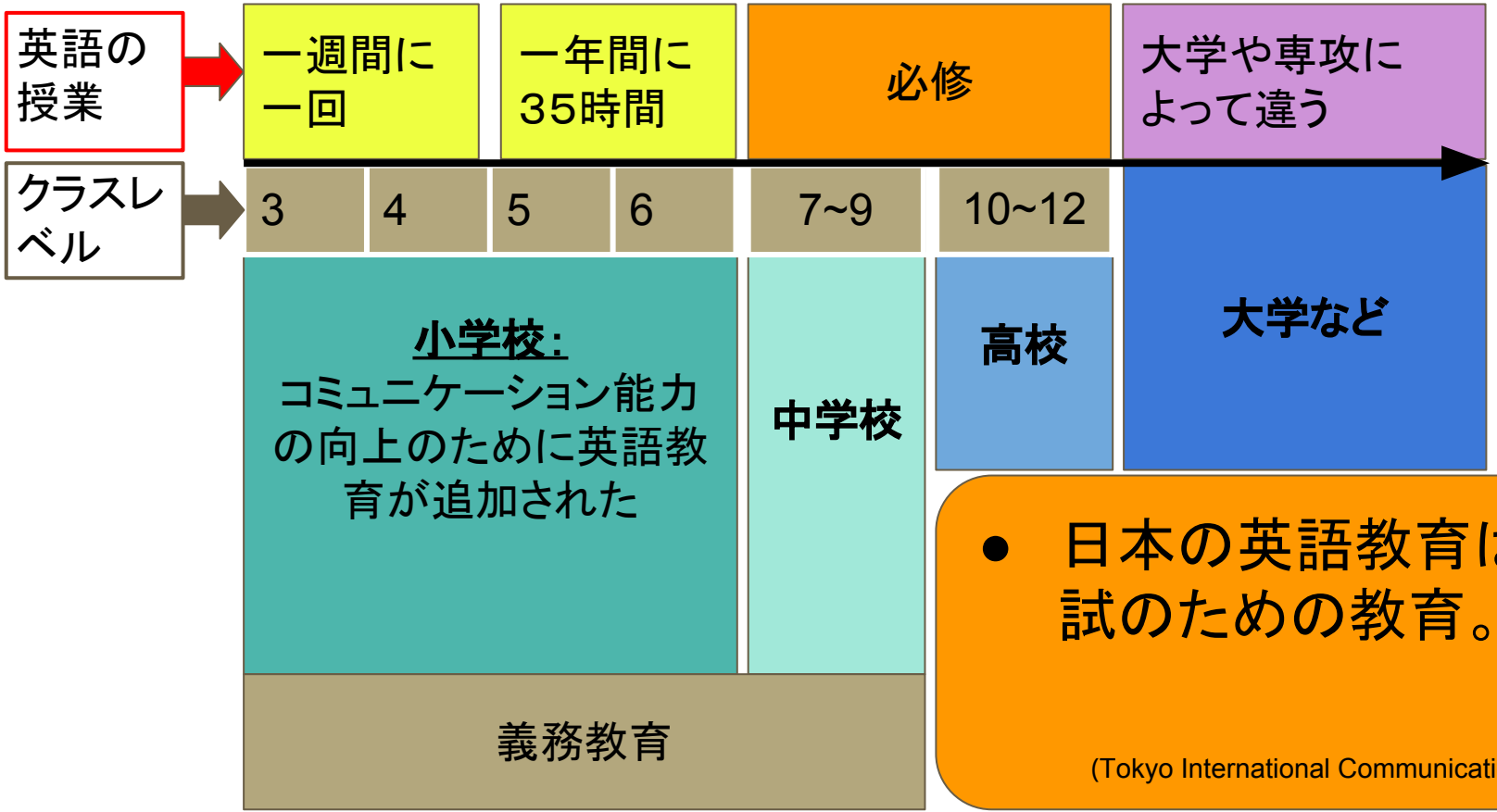
(Tokyo International Communication Committee, 2016)

外国語の履修登録の動向：日本



(Tokyo International Communication Committee, 2016)

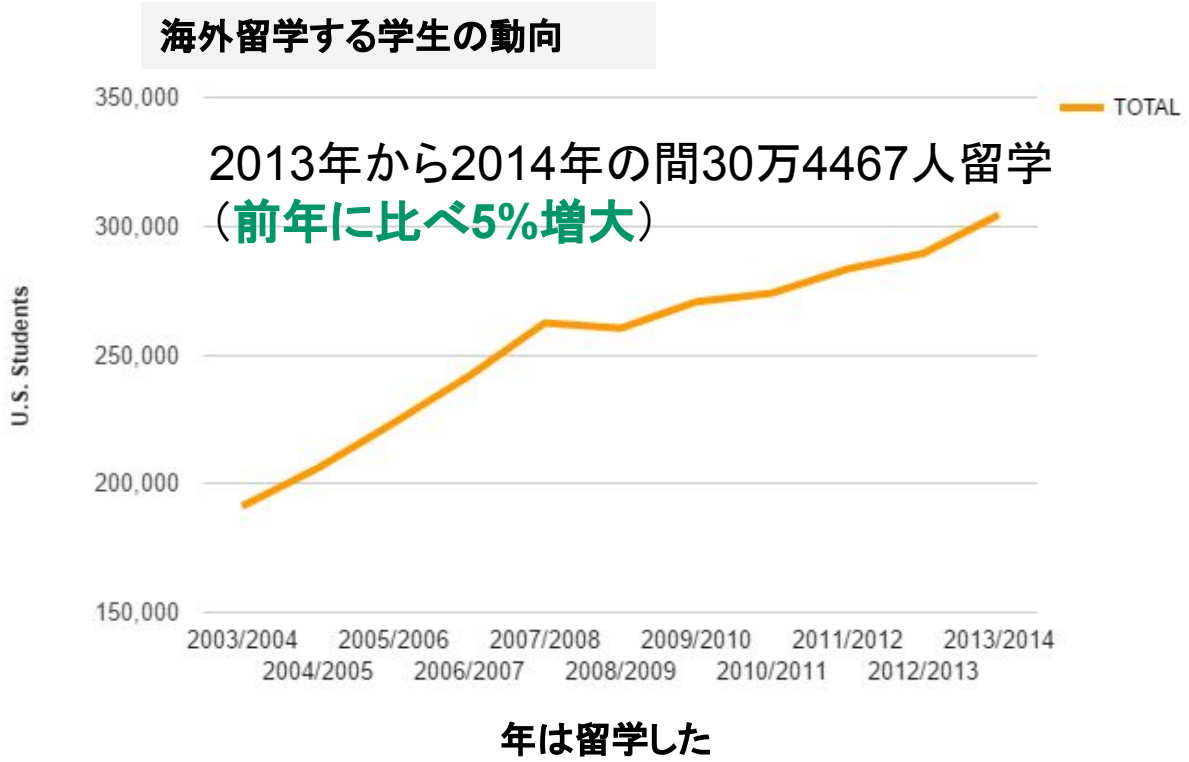
外国語の履修登録の動向：日本



- 日本の英語教育は大学入試のための教育。

(Tokyo International Communication Committee, 2016)

海外留学する学生の動向:アメリカ



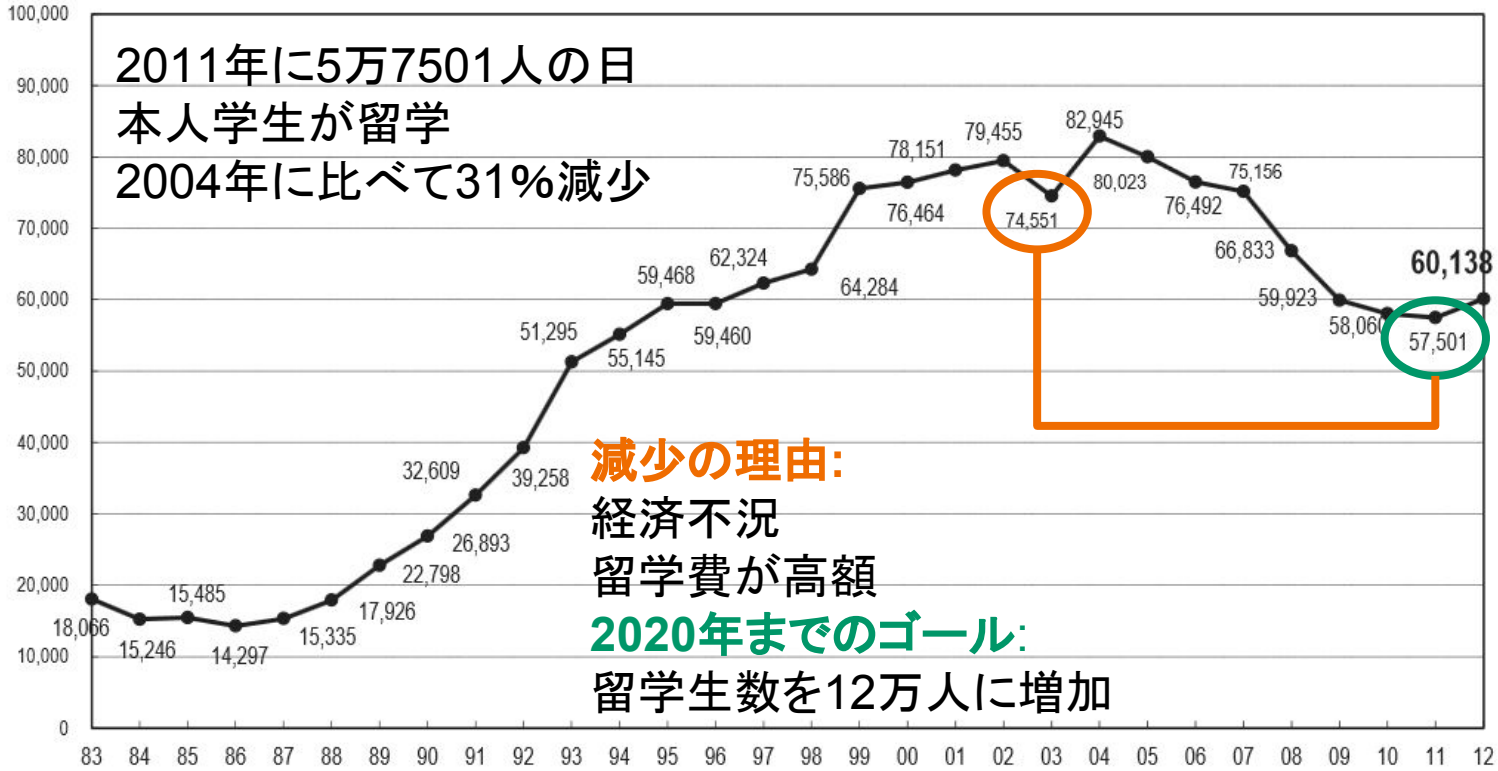
トップ3ゴール

- 数を600万人に増やす
- 多様性を拡大する
- 奨学金の増加

(Institute of International Education, 2014)

海外留学する学生の動向：日本

- 留学する日本人について傾向



(MEXT, 2015)

外国語教育の変遷:アメリカ

オポチュニスト　ディスミッシブ

1960年代 - 1980年代　1980年代 - 現在

近年、外国語教育の重要性が見なをされてきている

言語は世界で活躍するための大事な技能

教育において外国語教育は重要視されていない

(Ovando, 2003)

利点:

- 異文化に対する柔軟性とインターカルチュラリティ
- 世界での経済政策での勝ち抜き国の安全のため
- 学力向上と問題解決する能力

(The Benefits of Second Language Study, 2007)

外国語教育の変遷：日本

1964--東京オリンピック

1960年代

文法と言語の構成を重視

- 異文化間のコミュニケーションの不足
- 日本の外国語教育が効果的ではないことに気が付く。

(Fast, 2014)

外国語教育の変遷：日本

1964--東京オリンピック

1970年代

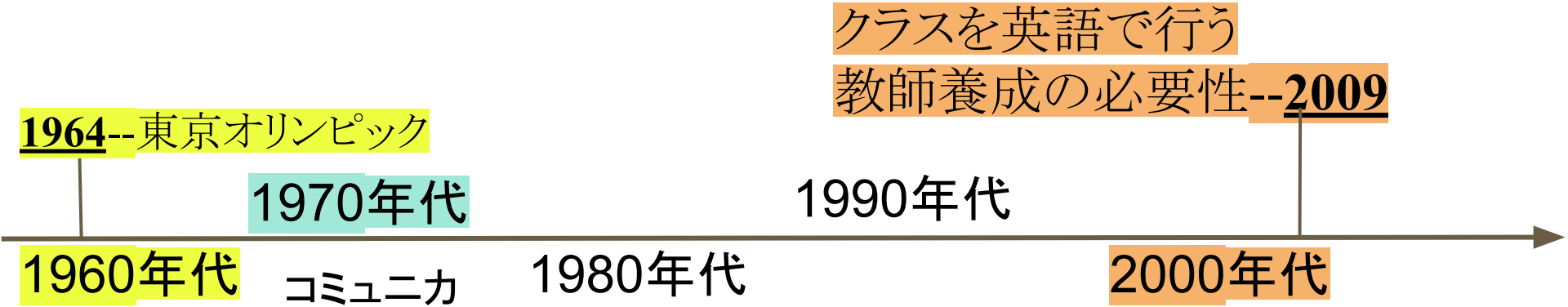
1960年代

コミュニカティブ・アプローチに戻る試み

文法と言語の構成を重視

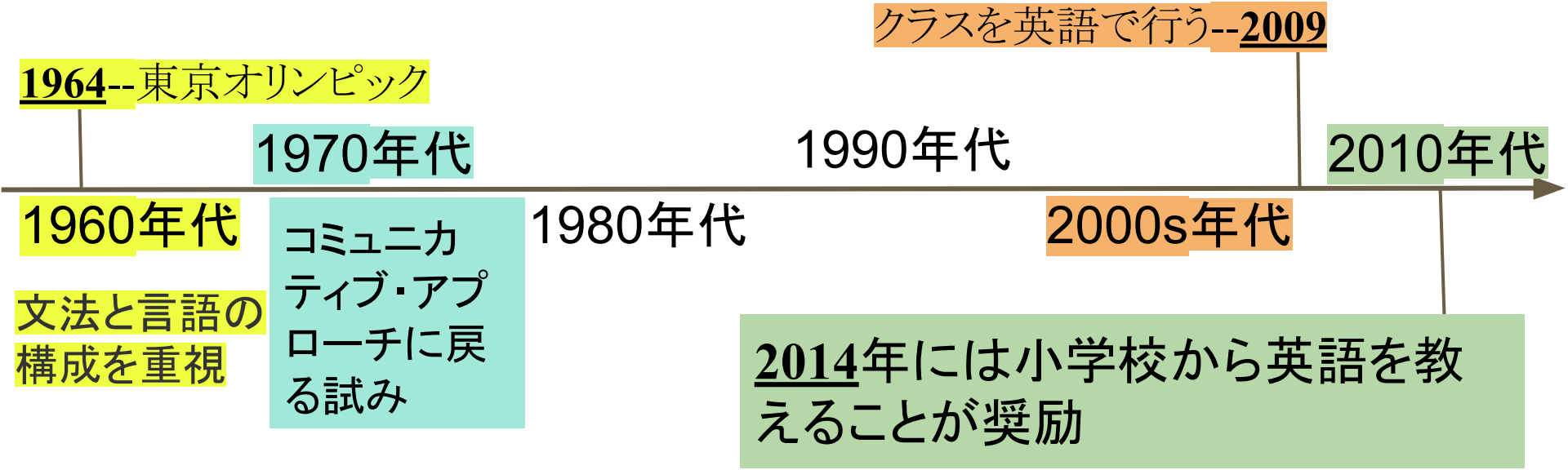
(Fast, 2014)

外国語教育の変遷：日本



(Fast, 2014)

外国語教育の変遷：日本



(Fast, 2014)

文法からコミュニケーションへ：アメリカ

1800-1960	1940-1960	1986	1960-2000	1996	2015-現在
文法翻訳	オーディオリンガル	ACTFLガイドライン	コミュニカティブ	ナショナルスタンダーズ1.1	ナショナルスタンダーズ2.0
-暗記 -翻訳 -文法が中心	発音 暗記 反復練習	-プロフィシェンシーが中心	-実生活のタスク -本物の言語 -様々なラーニングスタイルのアピール	-コミュニケーション -異文化 -コネクション -比較 -コミュニティー	-グローバルコンピテンシー -コーモンコーア -21世紀のスキル -インターカルチュラリティ

(Wells et al., 2013)

文法からコミュニケーションへ：アメリカ

1800-1960	1940-1960	1986	1960-2000	1996	2015-現在
文法翻訳	オーディオリンガル	ACTFLガイドライン	コミュニカティブ	ナショナルスタンダーズ1.1	ナショナルスタンダーズ2.0
-暗記 -翻訳 -文法が中心	発音 暗記 反復練習	-プロフィシェンシーが中心	-実生活のタスク -本物の言語 -様々なラーニングスタイルのアピール	-コミュニケーション -異文化 -コネクション -比較 -コミュニティー	-グローバルコンピテンシー -コーモンコーア -21世紀のスキル -インターカルチュラリティ

- アドバンスド・プレイスメントテスト(AP)
  - グローバルな視点と 世界的な能力
  - 話すと聞くセクションがある
  - 高校生は、自発的にこのテストを受ける

(Wells et al., 2013)

文法からコミュニケーションへ：日本

1870s	1940-1960	1970s-1980s	2003-2008	2011-現在
文法翻訳法	オーディオリンガル	コミュニカティブ	文部科学省のアクションプラン	文部省のアクションプラン「改訂版」
-翻訳が中心 -読解練習	発音 -暗記 繰り返し	-オーラルコミュニケーション	グローバルコンピテンシー -コミュニケーション	グローバルコンピテンシー -能力ベースの言語活動 -コミュニケーション

(Shimizu, 2010)

文法からコミュニケーションへ：日本

1870s	1940-1960	1970s-1980s	2003-2008	2011-現在
文法翻訳法	オーディオリンガル	コミュニカティブ	文部科学省のアクションプラン	文部省のアクションプラン「改訂版」
-翻訳が中心 -読解練習	-発音 -暗記 -繰り返し	-オーラルコミュニケーション	グローバルコンピテンシー -コミュニケーション	-グローバルコンピテンシー -能力ベースの言語活動 -コミュニケーション

集中は。。。

- 4つ の基 本 言語 技 能：聞 く・話す・読む ・ 書く
- 大学入試試験

(Shimizu, 2010)

外国語教育基準:アメリカ

- World Readiness Standards

目的: 基準をもとに測定された国際的な感覚をもたらす能力と理解力を将来の仕事と経験に適応できるように学習者が準備すること

(World Readiness Standards 2014).

- 3つのコミュニケーション形態
- インターパーソナル・解釈形態・プレゼンテーショナル
- コモン・コアスタンダーズ
- 読む・書く・聞く・話す
- ACTFL言語能力ガイドライン
- 初級・中級・上級
- 21世紀型スキル
- インターカルチュラリティ

(The National Standards Collaborative Board 2015)

World Readiness National Standards：アメリカ

- コミュニケーション:英語以外の言語でコミュニケーションを行う
- 文化:他の国の文化について知識と理解を深める
- コネクション（つながり）:他の教科内容に関連づけ、情報を得る
- 比較:比較により、言語と文化への洞察力を養う
- コミュニティー（地域社会）:国内及び国外において多言語社会に参加する

(The National Standards Collaborative Board 2015)

外国語教育基準：日本

文部科学省のアクションプラン「戦略構想」

目的：経済・社会等のグローバル化が進展する中、子ども達が21世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付け ることが必要であり、このことは、子ども達の将来のためにも、我が国の一層の発展のためにも非常に重要な課題となっている。 (MEXT, 2003)

- ガイドライン
- 外国語の必修教科におけるコミュニケーション活動
- 担任の先生から教わった
- 英語授業時間が増える
- 105時間から140時間まで
- 英語4つ の基 本 言語 技 能
- 読む・書く・聞く・ 話す
- 英語イマージョン教育

(Tahira, 2012)

大学生の経験：不安のタイプ

- コミュニケーション
  - 人々と情報交換する心配またはそれについての不安によって特徴づけられる内気のタイプ
- テスト
  - 失敗の恐れから生じているパフォーマンス不安のタイプ
- 否定評価
  - 他の人からの評価の心配

(Horwitz, E. K., Young, D. J., & Gardner, R. C. 1991)

不安に関しての大学生の経験：アメリカと日本

下記の例はアメリカ人と日本人の学生が一般的に経験した不安なできこと。

アメリカ

- 発音を間違える
- テストにより異なる
- 人前での発表

日本

- 文化的な誤解
- 試験または成績で良い点数を取らなければならないプレッシャ
- 人前で間違える

(Horwitz, E. K., Young, D. J., & Gardner, R. C. 1991)

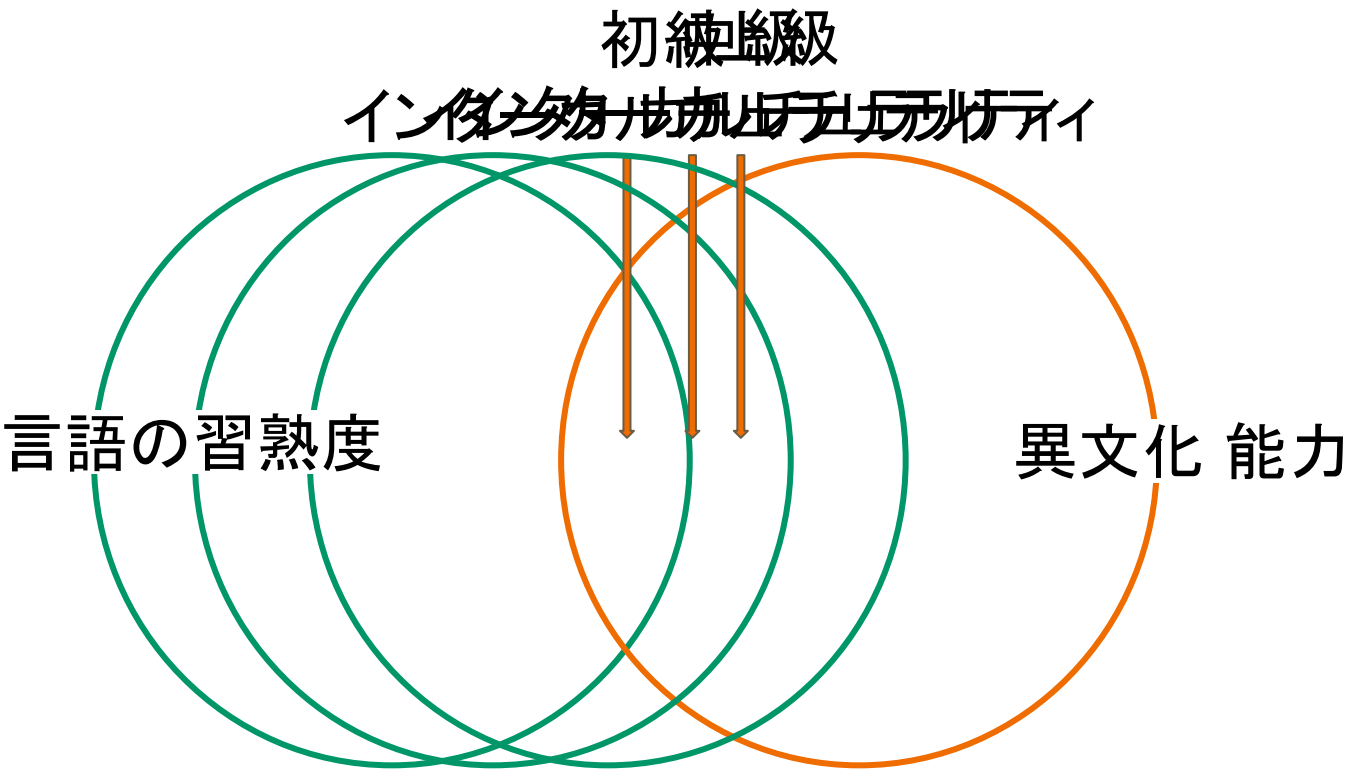
インターカルチュラリティの重要

インターカルチュラリティは、異文化をお互いに認めあいその文化にあった表現をつかえること。

(Rollings-Carter 2010)

(Terrill 2014)

インターカルチュラリティの重要:イメージ



(Van Houten, J.2016)

外国語教育でインターカルチュラリティ

授業でインターカルチュラリティを教えることは理想的

インターカルチュラリティを学ぶための一番良い方法は…

海外留学

多文化や多言語コミュニティとの交流

例：ボランティア
お祭りへの参加
ペンパルに手紙を書く

(Van Houten, J.2015)

研究方法

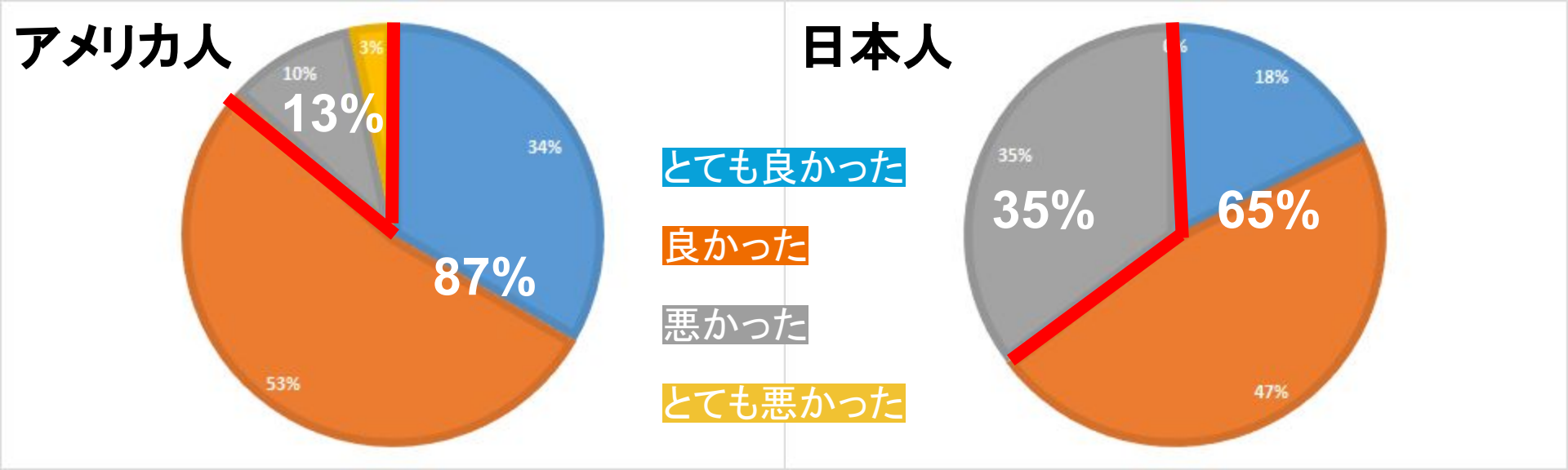
- **アンケートの回答者 ○大学生64人**
  - 日本人大学生 34人
    - 男子学生16人、女子学生17人、中性1人
  - アメリカ人大学生30人
    - 男子学生13人、女子学生16人、中性1人
- 研究調査○ グーグルフォームによるオンラインアンケート
  - 英語のアンケート ■ 日本語のアンケート

研究結果1

研究質問1

自分が受けた外国語教育をどのように思っているか。

外国語教育に関する評価



約90%のアメリカの学生と65%の日本の学生が外国語教育に対して前向きな経験を持っていた。しかし、3割以上の日本の学生が外国語教育に対して否定的な意見を持っていた。

評価の理由:アメリカ

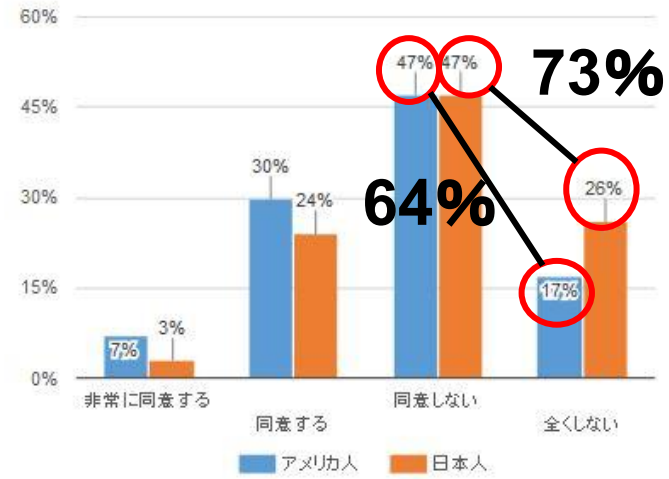
肯定的	否定的
外国語の先生方が楽しく教えてくれるので”あまりクラスでプレッシャーを感じない。実際勉強をするのが楽しい。 (女性 20-22歳)	スペイン語を学んだ最初の二年間のスペイン語の先生のスペイン語の能力は自分とはあまりかわらない、だから理解が深まらなかった。 (男性 20-22歳)

評価の理由：日本

肯定的	否定的
「中学校と高校の英語の授業は文法やリーディングばかりであまり楽しくありませんでしたが、大学の英語の授業は会話もするので、おもしろいからです。」 （女性、20-22歳）	「退屈 文法だらけで一方的 教授がグダグダ」 （女性、20-22歳）

否定的な評価に対する不安：先生への不安

“先生に私の間違いを直されるのが恐い。”



73%

64%

アメリカ人と日本人のどちらとも同意しないと回答

アメリカ人

日本人

ほとんどの日米の学生共、先生に間違いを直されることが不安に繋がるということはない。

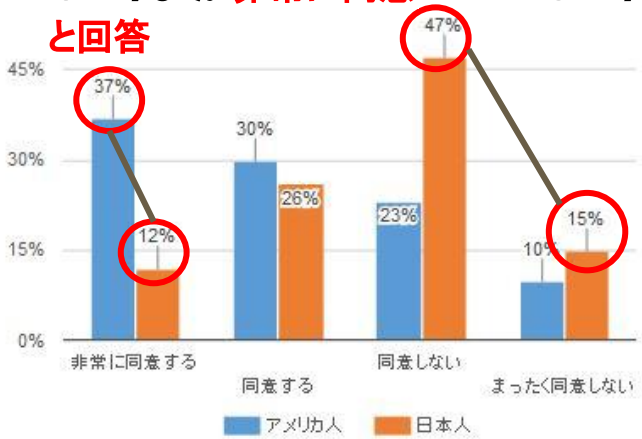
(Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J., 1986)

否定的な評価に対する不安：友人への不安

“いつも他の学生の方が私より優れている。”

アメリカ人学生の
67% が非常に同意と回答

日本人学生の
62% が同意しないと回答



アメリカ人

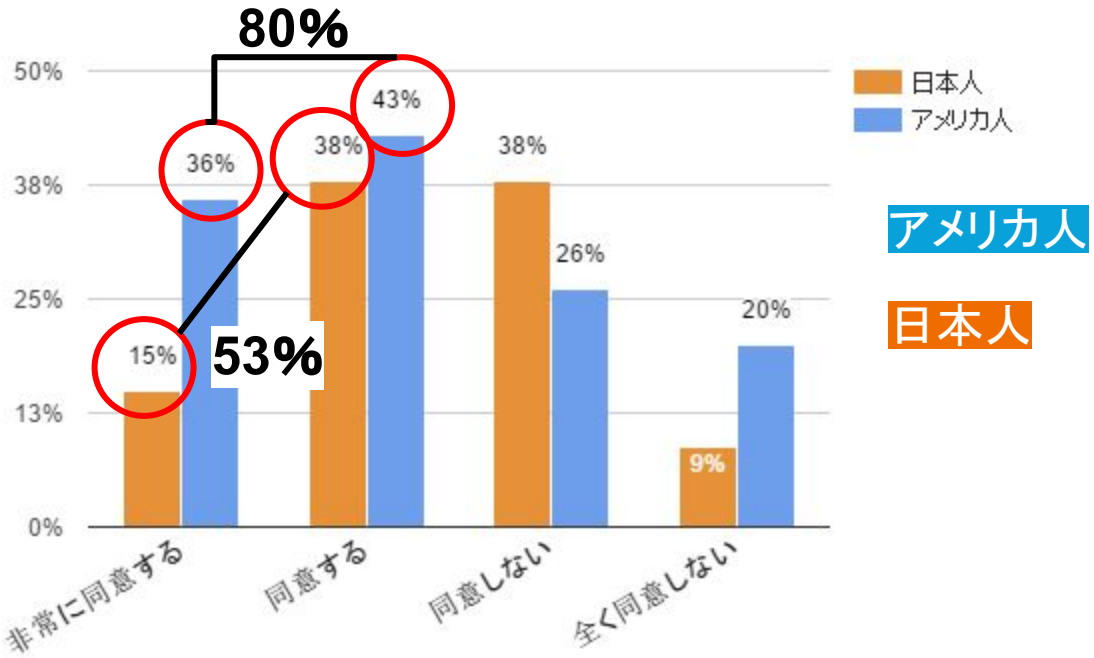
日本人

約70%のアメリカ人の学生が他の学生の方が自分より優れていると回答した。
一方で約60%の日本人の学生は優れていないと回答した。

(Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986).)

テストに関する不安

“試験でいい成績を取るため、プレッシャーを感じる”

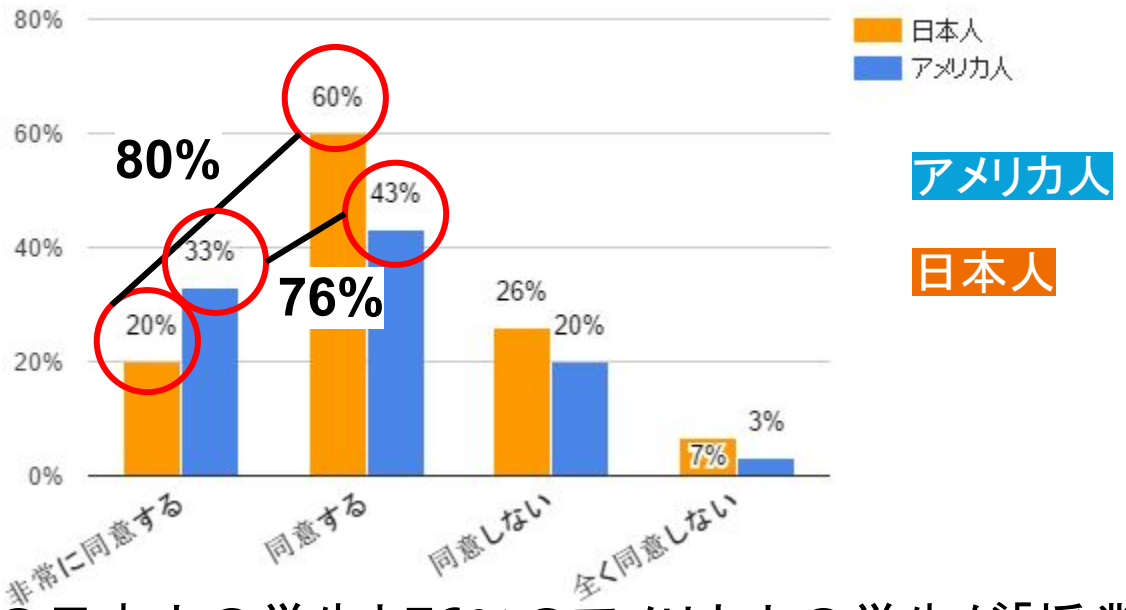


80%のアメリカ人の学生は、53%の日本人の学生と比べて「試験でいい成績を取るため、プレッシャーを感じる」と答えた。

(Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986).)

コミュニケーションに対する不安

“授業中に準備しないで話さなければいけない時、うろたえてしまう。”

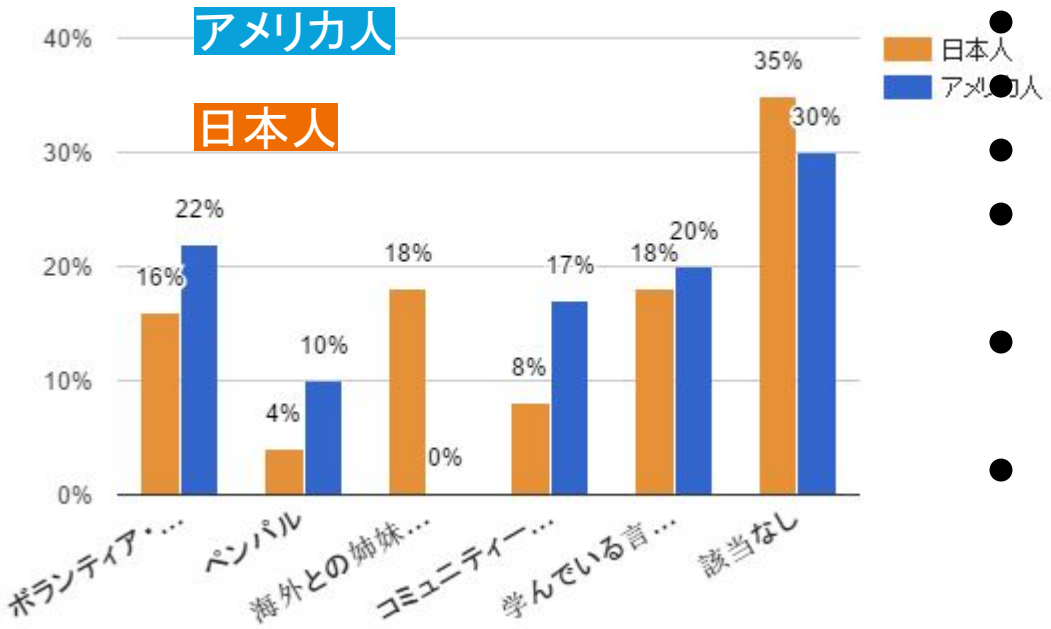


80%の日本人の学生と76%のアメリカ人の学生が「授業中に準備しないで話さなければいけない時、うろたえてしまう。」と答えた。

(Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986).)

地域と繋げたプロジェクト

外国語の授業で、プロジェクトなどをしたことがありますか



- ボランティア・サービスラーニング
- ペンパル
- 海外との姉妹交流
- コミュニティーイベントに参加する（例：祭り）
- 学んでいる言語と関係のある場所（例：レストラン）
- 該当なし

70%のアメリカ人と65%の日本人が一つ又はそれ以上の地域に関したプロジェクトに参加したことがあると答えた。

研究質問1まとめ

- アメリカの学生の方が日本の学生より外国語教育に対してより肯定的な経験を持っている。
  - 肯定的な理由：アメリカ　**良い教師**
  - 肯定的な理由：日本人　**教師が外国語母語話者、なので授業で外国語を使って会話に参加できる機会がある。**
    - 否定的な理由：日本　**クラスのカリキュラムが書く、読む、聞く中心で、話すことに焦点は置かれていなかった。**
- 外国語の授業ではアメリカ人の方が日本人よりクラスメートと自分に**パフォーマンス**を比較したり、テストに対す不安度が高い。
- 両国でも外国語の授業で地域につながるプロジェクトをとりいれている。

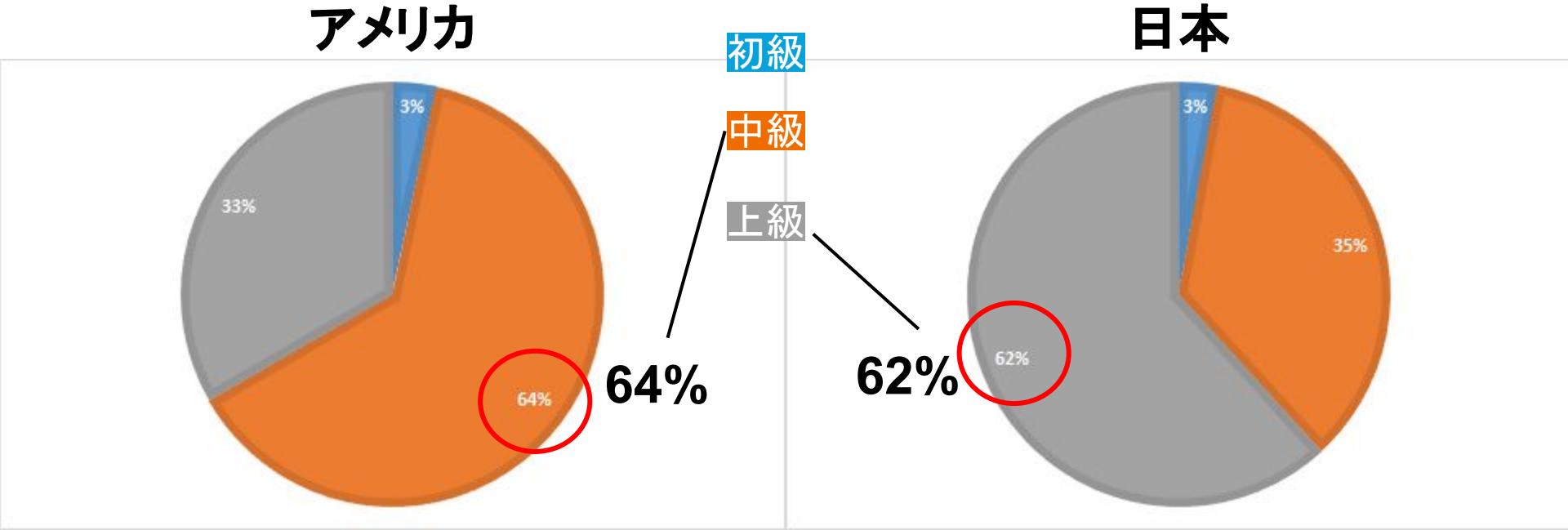
研究結果2

研究質問2

外国語は、異文化に対する知識をどのように言語を通して深めるのか。

外国語クラスのレベル

今まであなたの国で取った外国語クラスの中で、最も高いレベルは……



アメリカ人の大半は中級レベルの授業を取っていた一方、日本人の大半は上級レベルの授業を取っていた。

外国語能力：プロフィシェンシー

- 次のスライドは「話す」能力に関しての質問に関する回答。
- 質問の難易度は初級から上級まで。
- データ調査方法の一環としてACTFLの「自己能力評価」を用いた。
- 自己能力評価としてのCan-do statementの使用。
- Can-do statementは、日米国内の言語教育の現場において、各学年や学期ごとの目標の記述、自己評価や教師による評価のために使うチェックリストの作成、タスク達成評価の基準作成などのために取り入れられている。

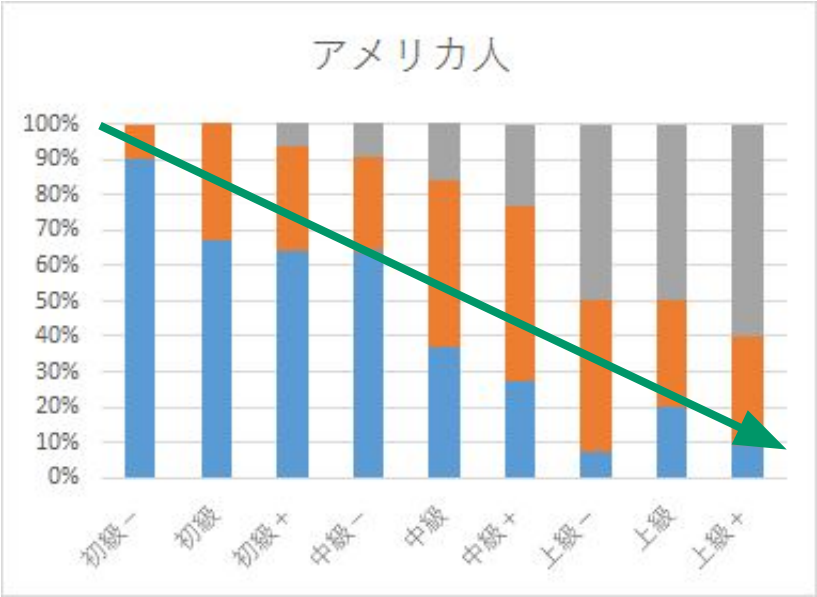
(NCSSFL,2015)

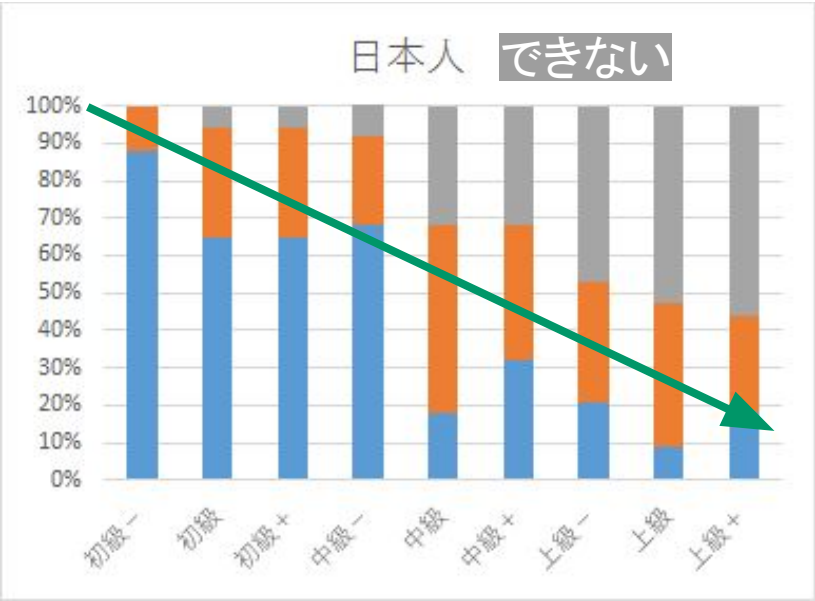
外国語能力：プロフィシェンシー

簡単にできる

何とかやり通すことができる

自己能力評価の結果

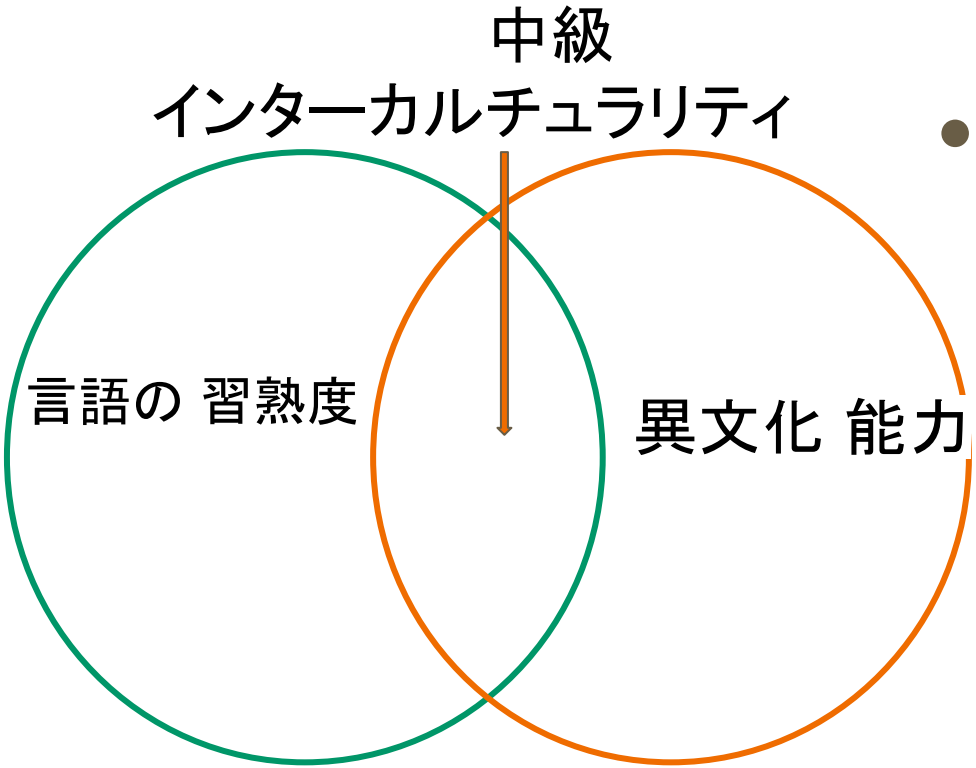




アメリカ人も日本人も自己能力評価に関しては全体的にみて初級の下から中級の下が多いという同じようなレベルに自己評価した。

(NCSSFL, 2015)

インターカルチュラリティ



- 中級レベルの質問に基づいてデータを分析した

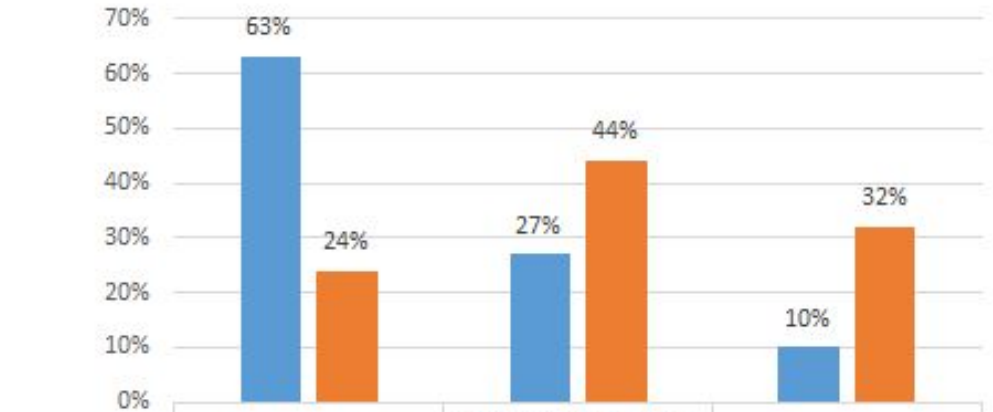
(Van Houten, J.2016)

インターカルチュラリティ:招待を受けたり断ったりできる

通常、その国の文化に即した方法で招待を受けたり断ったりできる。

アメリカ人

日本人



	簡単にできる	何とかやり通すことができる	できない
アメリカ人	63%	27%	10%
日本人	24%	44%	32%

アメリカの学生は日本の学生に比べて外国語で招待を受けたり断ったりする事に自信を持っている。

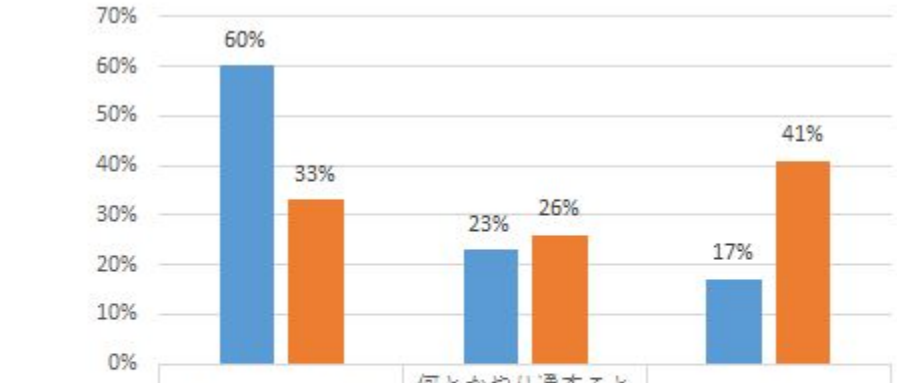
(NCSSFL, 2015)

インターカルチュラリティ:
贈り物をあげたり、受け取ることができる

その国の文化に即した方法で贈り物をあげたり、受け取ることができる。

アメリカ人

日本人



	簡単にできる	何とかやり通すことができる	できない
アメリカ人	60%	23%	17%
日本人	33%	26%	41%

日本人よりアメリカ人の方が、外国語を用いて贈り物をあげたり受け取ったりする事に自信を持っている

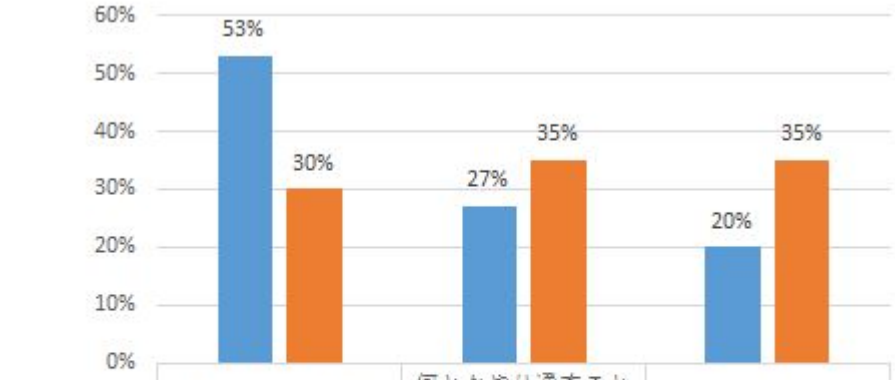
(NCSSFL,2015)

インターカルチュラリティ：会話をする際のマナー

その国に即したボディーランゲージを使ったり、うまく話のやりとりをしたり、会話をさえぎったり、同意したりすることができる。

アメリカ人

日本人



	簡単にできる	何とかやり通すことができる	できない
アメリカ人	53%	27%	20%
日本人	30%	35%	35%

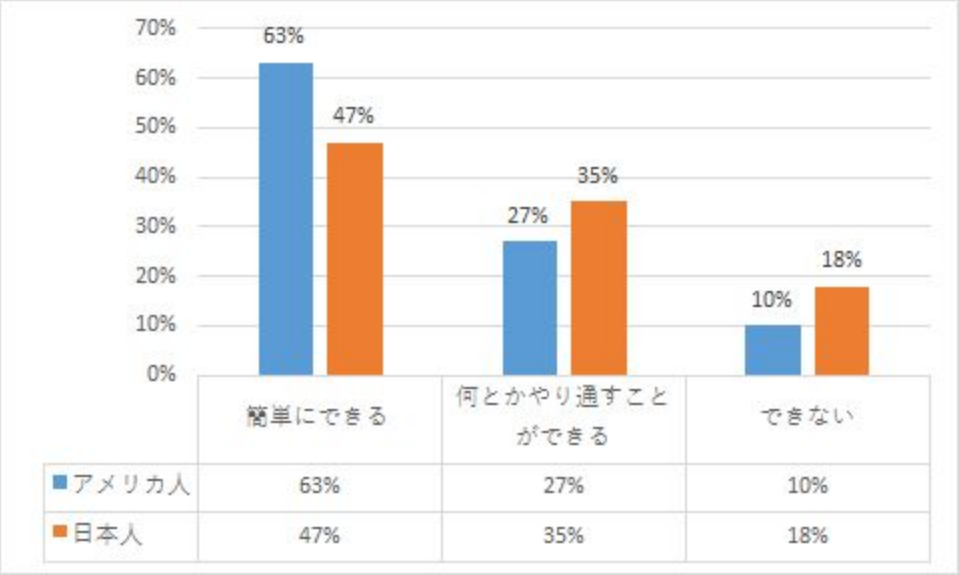
日本人よりアメリカ人の方が、外国語を用いてボディーランゲージを使ったり、うまく話のやりとりをしたり、会話をさえぎったり、同意したりすることに対して自身を持っている。 (NCSSFL,2015)

インターカルチュラリティ:その他のマナー

誰かがくしゃみをした時、乾杯をする時、また、褒めてくれた時など、その国の文化に即した方法で対応することができる。

アメリカ人

日本人



日本人よりアメリカ人の方が、外国語を用いて誰かがくしゃみをした時、乾杯をする時、また、褒めてくれた時などに上手く対応できるという自信を持っている。

(NCSSFL,2015)

研究質問2のまとめ

- 日本人の学生の方が上級レベルまでの授業を取っているのに比べ、アメリカ人の学生の大多数は中級レベルの授業までしか取っていないが外国簿の能力の自己評価は同じレベルになった。
- アメリカ人の学生と日本人の学生の「話す」能力は似たようなレベル。これは日本の外国語の授業はまだコミュニケーション能力をあまり取り入れていないというリサーチを裏付ける。
    - 私たちが調査を通して得たことは、インターカルチュラリティにおいて自信を持っている日本人が相対的に少ないということであり、このことは実際の社会で適切な方法で外国語を用いる事が困難な事を証明した。

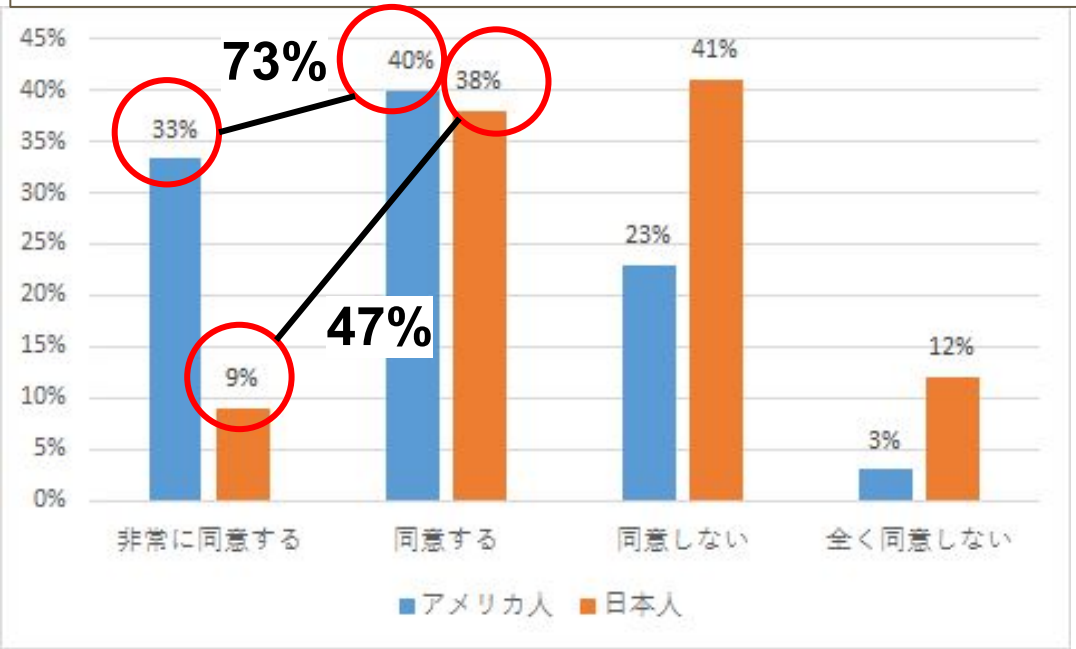
研究結果3

研究質問3

外国語教育は学生と多文化社会を繋げるためにどのような役割を果たしているのか。

多文化社会のコミュニティと繋がり

多文化コミュニティと関係を築くことができる。



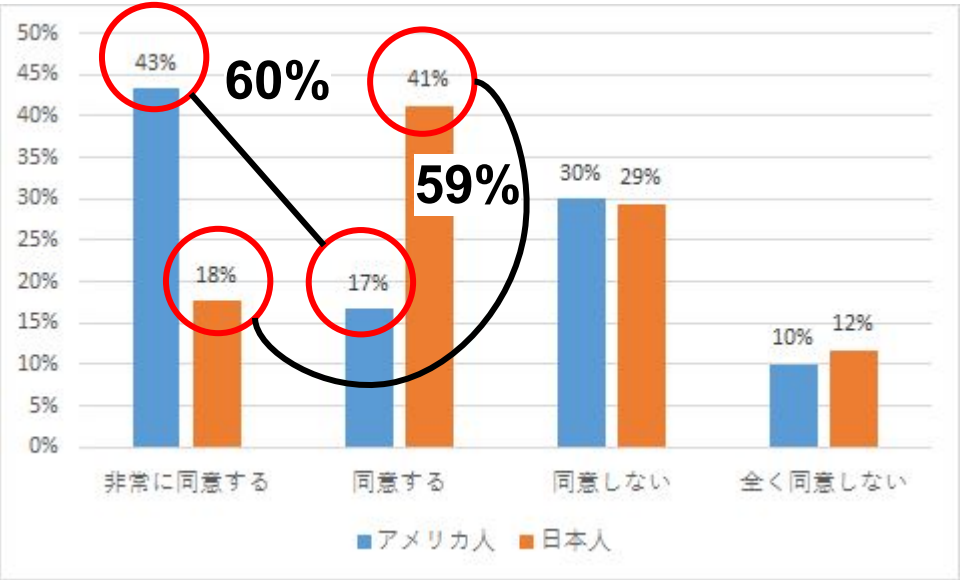
アメリカ人

日本人

約70%のアメリカ人は外国語教育によって多文化コミュニティとつながりを持つことができたと同意したのに対し、約50%の日本人は同意しないと回答した。

外国語教育と母語話者との繋がり

外国語教育は学んでいる言語の母語話者との関係を築くことができる



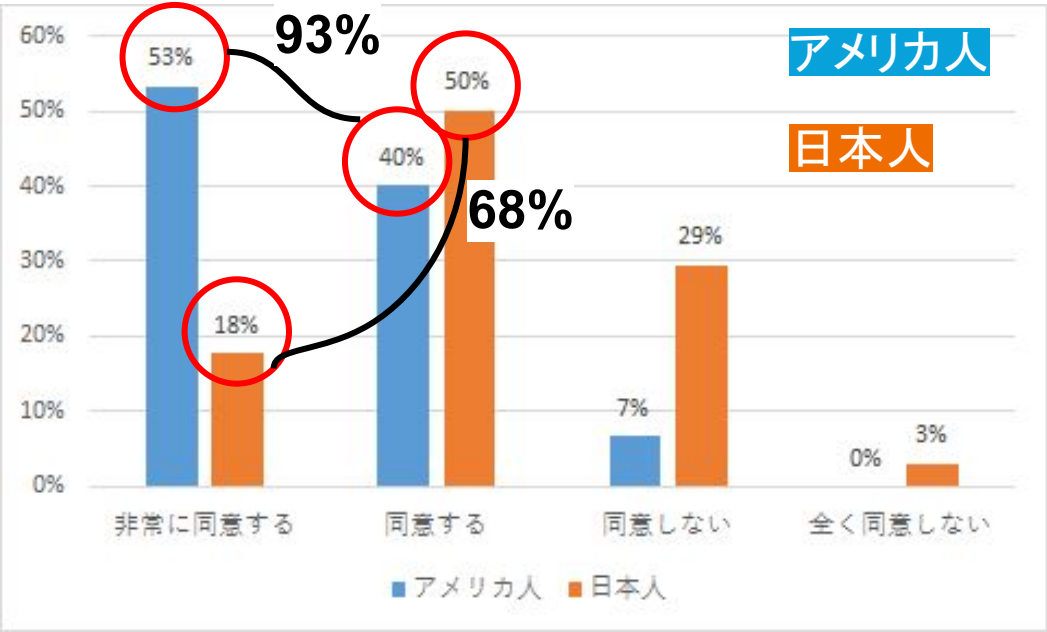
アメリカ人

日本人

60%のアメリカ人の大学生と59%の日本人の大学生は学んでいる言語の母語話者との関係を築くことができると同意した。しかし、アメリカ人の大学生の方が日本人の大学生より非常に同意すると回答した割合が多かった。

他の文化への理解

他の文化やその文化の人を受け入れ、理解することができる。



93%のアメリカ人は、外国語教育が他の文化をより深く理解するのに役立つと回答した。一方、68%の日本人も同じように回答した。

研究質問3まとめ

- 大半のアメリカ人は外国語教育を通して多文化社会とつながりを持てたと認める一方、日本人の意見はほぼ二分化された。

- 一般的に、日米の学生が感じたことは、彼らが母語話者と同程度の関係を構築できたということであり、アメリカ人はそれをより強く感じた。

  - おそらくこのことは、外国語が交流の幅を広げるとともに、調査の対象とした学生が概して良好な留学制度を持つ大学に通っているからだと推察される。

- 日米の学生は外国語教育のおかげで、より他の文化を理解し、受け入れるようになったことに賛同するのに対し、7%のアメリカ人と32%の日本人がこれに反対した。
  - このことは、アメリカでの外国語授業における対話と他の文化理解を重視しているところに因るのかもしれない。

結論

- アメリカ人の方が日本人よりインターカルチュラリティに高い自信を示すのは、熱意のある教師や、対話と他文化理解を重視すること、対象言語の話者と多文化社会との強いつながりがあるからだと考えられる。

- 必ずしも外国語を使う不安が、外国語教育に伴う学生の良い経験もしくは悪い経験を左右しない。むしろ、教師と授業内容が決定要因となっている。

- 日本人はアメリカ人に比べて多文化社会とのつながりが薄いと感じているが、日本人がアメリカ人と比べ単一民族国家であり、多文化社会に接する機会が少なく地域の多文化社会に関してプロジェクトの発展に繋がらない可能性があると考えられる。

- したがって、授業を通した多文化かつ多言語社会との関係を持つ機会を生み出し、実際に対象言語が用いられている社会で使う機会を提供することによって、授業での経験がより肯定的なものとなり、インターカルチュラリティが増すものと確信する。

研究の限界点

- 調査に協力した大半のアメリカ人はカリフォルニア出身であり、その多くは外国語専攻であった。
  - これが意味するのは、アメリカ全体の外国語教育の外観を正しく描写したものとは言えないだろう。
- また、調査に協力した大半の日本人は、アメリカに留学中の学生や、私たちが日本に留学中に出来た友人である。
  - そのため、このことも日本人から得られた回答結果を歪めている可能性は否定できない。

将来の研究課題

- 大学の授業から得た経験と、高校で学んだ経験を別々に調査したい。特に、様々な経験を提供する大学や高校で学んだ日本人の学生のインターカルチュラリティの習得過程を詳細に調査したい。

調査の文献

Can-Do Statements – NCSSFL. (n.d.). Retrieved May 05, 2016, from http://ncssfl.org/linguafolio/ncssfl-actfl-collaboration/

Dornyei, Z. (1990). Analysis of Motivation Components in Foreign Language Learning.

Fast, T. (2014, November 15). We're Going Global?! A Look at Local Efforts to Implement Japanese National Education Goals. Retrieved November 17, 2015.

Horwitz, E. K., Young, D. J., & Gardner, R. C. (1991). Language anxiety: From theory and research to classroom implications. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. The modern language journal, 70(2), 125-132.

Ovando, C. (2003). Bilingual Education in the United States: Historical Development and Current Issues. Bilingual Research Journal, 27(1). Retrieved November 18, 2015.

Paran, A., & Sercu, L. (Eds.). (2010). New Perspectives on Language and Education : Testing the Untestable in Language Education. Clevedon, GBR: Multilingual Matters. Retrieved from http://www.ebrary.com

MEXT. (2002, July 12).「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について . Retrieved May 14, 2016, from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm

MEXT. (2011). Survey on the Five Proposals and Specific Measures for Developing Proficiency in English for International Communication. Retrieved May 14, 2016, from http://www.mext.go.jp/english/elsec/1319701.htm

Number of Japanese studying abroad down seventh straight year | The Japan Times. (n.d.). Retrieved April 08, 2016, from http://www.japantimes.co.jp/news/2014/03/25/national/number-of-japanese-studying-abroad-down-seventh-straight-year/#.VwfV5no7fCs

Rollings-Carter, F. (2010). What is interculturality? Retrieved December 16, 2015, from http://www.learnnc.org/lp/editions/linguafolio/6122

Shimizu, M. (2010). Japanese English Education and Learning: A History of Adapting Foreign Cultures. *Educational Perspectives*, *43*, 5-11.

Tahira, M. (2012). Behind MEXT's new Course of Study Guidelines. The Language Teacher. Retrieved March 26, 2016.

Terrill, L. (2014). Effective Lesson Design: Making Every Minute Count. Retrieved December 16, 2015, from https://lauraterrill.wikispaces.com/Presentations

The National Standards Collaborative Board. (2015). World-Readiness Standards for Learning Languages. 4th ed. Alexandria, VA: Author. - See more at: http://www.actfl.org/publications/all/world-readiness-standards-learning-languages#sthash.HPz1IC3T.dpuf

調査の文献

The Advanced Placement Program(AP):An International Program A Global Credential. 1st ed. 2016. Web. 7 Apr. 2016.

Van Houten, J.(2016). Moving through the levels of interculturality—a visual representation [PowerPoint presentation].

Warner,I.(2014).English Language Proficiency Testing in Japan.113-124.Retrieved from http://kiui.jp/pc/kiyou/kiyou-no25/honbun/11.pdf

Wetzel, P., & Watanabe, S. (1998). Assessing Second Language Proficiency in an American University.

What Is Intrinsic Motivation? (n.d.). Retrieved March 31, 2016, from http://psychology.about.com/od/motivation/f/intrinsic-motivation.htm

How Does Extrinsic Motivation Influence Behavior? (n.d.). Retrieved March 31, 2016, from http://psychology.about.com/od/eindex/f/extrinsic-motivation.htm

World Language Content Standards for California Public Schools: Kindergarten through Grade Twelve. (2010). Retrieved November 17, 2015.

World Readiness Standards for Learning Languages. (2012). Retrieved November 17, 2015.

Sakurai, R. (2016, February 9). Motivation　モチベーション . Retrieved April 14, 2016, from http://www.everywherepsychology.com/p/motivation.html

Intercultural Can-Do Competencies – NCSSFL. (n.d.). Retrieved May 05, 2016, from http://ncssfl.org/resources/intercultural-can-do-competencies/

謝辞

齋藤佳子教授
関根繁子教授
高橋周臣教授
ガス・レナード
今年卒業する日本語専攻の
クラスメート達

翻訳の手伝いをしてくださった
日本人の友達
岡田陽祐さん
大橋 美遥
林美月
大橋 美遥
ハイムス・瀬里奈